

暖温（丘陵）帯と冷温（山地）帯の上限下限付近では、南側斜面に常緑樹林、北側斜面に落葉樹林が対照的に生育しやすいと言える。このように

植生と気候には密接な関係があることがわかったが、温度条件に対応しないモミの分布の成因等については、今後の課題としたい。

## 新宿区・杉並区・国立市の緑地に関する地理学的考察

柳川 比苗子

### 〔1〕 研究の目的と方法

都市の環境破壊に伴って、現在緑地は危機的状况に陥っている。そこで本論では戦前から発達した市街地として新宿区、戦後発達し安定した市街地として杉並区、今後も市街化が予想される地域として国立市を選び、3地域の比較を通じて都市地域における緑地の分布と緑地減少の原因を明らかにし、緑地残存のための条件を考察することにした。方法としては市町村が実施した緑化基本調査の結果及びカラー1万分の1空中写真からの判読結果を基本的資料とし、6項目にわたって各地域の緑地を分析した。また行政側への聴取調査と住民側へのアンケート調査の結果をもとに、行政と住民が緑化に果たす役割を考察した。

### 〔2〕 要約

まず各地域に残存する緑地の種類と分布を把握する。①新宿区：江戸時代の寺社移転に起因する寺社の緑や、かつての武家地を起源とする公園、公共施設の緑など大規模な樹林群が区内に散在しているため、緑被状況は必ずしも悪くないが、一般の住宅地では日常的住環境の中に緑がとりいれている地区は区内北西部に若干みられる程度で、大部分の地区では必ずしも良好な居住環境とはいえない。②杉並区：市街化の早かった鉄道沿線や都心部に近い地区では緑被率が低い、北部・西部では宅地の緑や農地を中心に緑地が残存し、樹林地をとりいれた大規模公園を有する地区も安定した緑被率を保っている。しかし近年、北部での農地潰廃による宅地化や、西部での宅地細分化等で緑地の激減が局部的にみられている。③国立市：市域自体が郊外に位置するため市内全域で緑被状況が良好である。樹林は主に学校施設等の公共

的施設にとりいれられ、街路樹の整備状況もよく南部には現在もお農地がかなり残存している。また敷地に余裕のある家が多いので宅地の緑も十分である。

これらの結果から緑地の起源は農地と樹林地に大別できる。農地は都心部に近いほど宅地に転用され残存しにくい。一方樹林地も都心部では自然地としては残存しにくい、公共施設にとりいれられた場合はその中で残存する。公共性を帯びた緑は不安定な個人の緑に比べ永続性があるので、いかに多くの樹林が公共施設にとりいれられたかがその地域の緑被率に影響している。

しかしその一方で、住民にとって身近に感じられるのは大規模な樹林群よりやはり居住環境の中の宅地の緑である。宅地の緑は市街化が急速に無秩序に進行した地域では不足し、その逆にたとえ都心部にあっても、計画的に市街化がなされた地域では宅地に余裕があって緑が豊富である。

このように感覚的にも豊かな緑が半永久的に保証されるには、宅地の緑と公共性のある緑の両方が必要だといえる。行政側は個人の手にある緑に公共性をもたせるため諸施策を設けているが、それらの多くは個人の協力を必要とし、住民が積極的に活用しないと意味をなさないのが現状である。このように緑化は、行政側の一方的な努力だけで成立するものではなく、行政と住民が一体となって共に推進していくものである。アンケート結果をみると、現在緑に恵まれている地域ほど緑化に対して消極的であるので、行政側は住民の自発的な緑化姿勢を誘発する施策を行う必要があり、住民の側も今まで無償で享受してきた自然を積極的に保護していく姿勢をもつことが望まれる。